

## 東シベリア、オイミヤコン—ハンディガ採集記

札幌市 高橋 英 樹

東シベリアヤクーチアでの3回目の調査になる1994年夏、スターリンの治世下に多くの流刑囚の犠牲によって作られたコリマ街道（オホーツク海に面するマガダンからヤクーツクに至る道路）のうちオイミヤコンからハンディガに至る地域で植物採集調査をおこなった。ほんの10日間と短い調査旅行だったが、日本人研究者としては初めて入る現地の様子を日をおって紹介する。なお標本整理がまだ終了していないため、

多くの植物名が属名までであることをあらかじめお断りしておく。

6月30日

前日の豪雨で目的地オイミヤコン空港が閉鎖されているため、その200k北のウスト・ニエラに向かう。11時ヤクーツク空港発、午後1時にはウスト・ニエラ空港に着く。最初の頃に驚いた砂利の滑走路も主要空港以外では普通で、慣れ親しんだ光景と

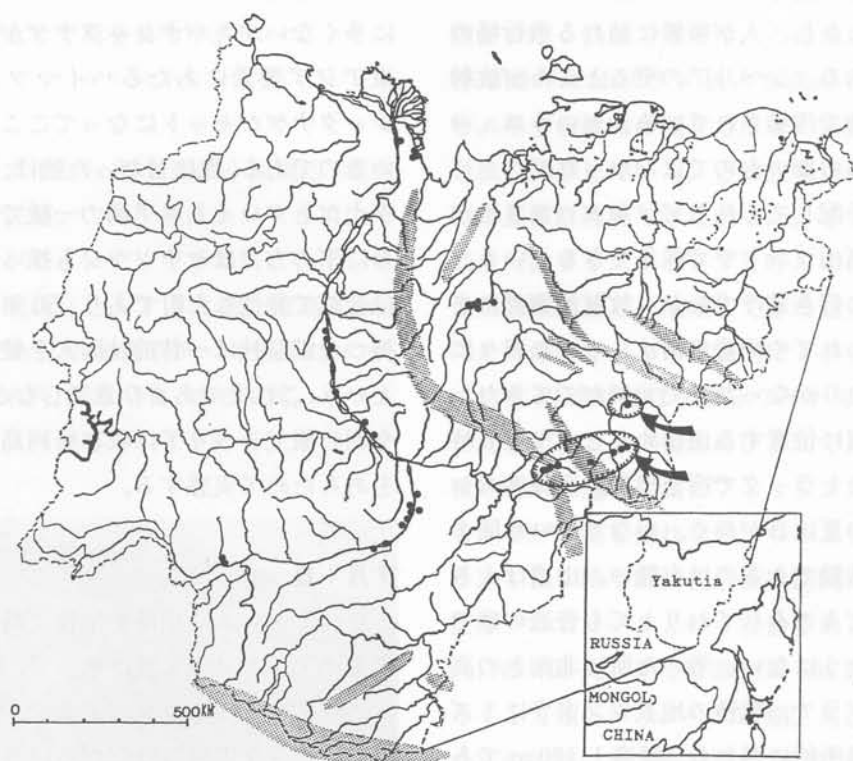


図1 ヤクーチアの位置。水系が線で山岳が網部分で示されている。1994年調査地域は矢印で示す。

なった。時計を1時間進めて現地時間に合わせる。突然の行き先変更だったので同行してくれたヤクーツク生物学研究所の昆虫学者ピノキュロフさんが宿や車の手配に走り回っている。我々は滑走路と空港事務所を結ぶ舗装路の脇に荷物を置いて待機していたが、この時とんでもない事件がおこる。同行の昆虫学者渡部さんが騒ぎだした。彼の持っている携帯放射線量計が異常に高い値を示している。コンクリートの地面に向けるとデジタル表示の数値がどんどん上がっていく。急速、場所を50mほど移動すると、数値も動かなくなる。いま思うと、放射能廃棄物が何等かの誤りでコンクリートと共に地面に埋め込まれてしまったのだろう。しかし、人が頻繁に訪れる飛行場の一角である。シベリアの至るところが放射能廃棄物で汚染されている、というニュースは根拠のないものではなかった。

車を手配してくれたピノキュロフさんが近くの高山ツンドラで採集できるという。目的地に行き着けずしかも放射能事件にまでおそわれてやや意気消沈していた我々には願ったりかなったりで元気がでてきた。町の南側に位置する山岳めざし、午後6時に大きなトラックで宿を出発。高緯度のシベリアの夏は日が長く、かなり遅い時間まで外で活動できるのは有難い。山道は大きな岩がごろごろしておりとても普通の車では行けそうにない。着いた所は北向きの高山ツンドラで、乾性の地衣ツンドラにミズゴケが局所的に混じる。標高1,120mである。冬はスキー場になっているとの事で、ヒュッテらしき建物もいくつかある。ダフ



図2 ウスト・ニエラの山岳ツンドラのキバナシャクナゲ。

リアカラマツの低木とハイマツ、ヒメイツツジ、カンバ属、ハンノキ属、ヤナギ属の矮性灌木がある。今春に遅霜があったそうで、ダフリアカラマツやハンノキ属の芽の先が枯れているものがある。数はそんなに多くないがキバナシャクナゲがある。北東アジア要素にあたるハイマツとキバナシャクナゲがセットになってここまで来ているのである。他に目だった物は、ヒメシャクナゲとクレイトニア属の一種である。さらに下の方ではヤチツツジも採った。ここは金鉱で発達した町であり、50年の歴史を持つ金鉱会社は一昔前は囚人を使っていたという。これまであまり意識しなかったが、今回の旅でシベリアは収容所列島である事をあらためて実感する。

#### 7月1日

ウスト・ニエラ空港を午後1時15分発、複葉のアントノフ2型に乗って、2時10分にめざすオイミヤコン(トムトル)空港に到着した。空港周辺はただだっぴろい平原であちこちに竜巻がおきている。いかにも大陸の中央部という感じである。マイナス

71.2度のモニュメントの前で記念写真を撮った後、60k先のベースキャンプ目指して西進する。陣容はジープと大型のトラック各一台、日本側から植物研究者2人、昆虫研究者2人の計4人、ヤクーチア側から生物学研究所の2人と地元のドライバー2人の総勢8人である。5k行った所でジープがパンク、これ以降もたびたびあったが、採集できる機会が増える我々としてはむしろ歓迎である。湿ったミズゴケツンドラにはサカイツツジがそこそこにある。午後7時、周囲をなだらかな山に囲まれた盆地状の村ウチュゲイ（ヤクート語でオーケイという意）に到着。ここで夏の間ガイドを生業とするバレンタインさんの家をベースキャンプとして荷をおろす。

### 7月2日

ウチュゲイから25k西の小流周辺（標高770m）で採集。この小流はスタル川にそそぎ、やがてインディギルカ川に合流して北極海に流れ込む。すぐ北側に標高1,086mの丘があり小流側を向いた南向きの斜面にはイネ科、マメ科、ヨモギ属、カマエロドス属、ベロニカ・インカナ、オロスタ



図3 ウチュゲイ西方のステップ植生。

キス・スピノーサなどからなるステップ植生が広がる。但し微妙な地形の違いにより植生が変わり、流れはないものの浅い谷状の所にはヤナギ属の低木、キキョウ属、ネギ属、アマ属、エゾノカワラマツバなどがある。クッション状に発達したユキノシタ属もあり、ツンドラの要素も含まれている。ベルホヤンスクのステップで見たマオウ属をずいぶん探したが、ここでは見つからなかった。もうひとつ先のアガヤカン川の木製の橋を越える。このような立派な橋は後ではお目にかからなかった。川の中州に渡ってトナカイの焼肉の昼食をとる。外で食べる食事にはヤブ蚊がつきもののシベリアだが、この場所は風が吹き抜けるためか蚊が少なく快適であった。このあたりの川畔や湖畔にはザラメ状の雪渓が残っている。単なる積雪の残りではなく永久凍土が形成に関与している、との説明だったが私には正確に理解できなかった。ピノキユロフさんはアイストラップと呼んでこの上で昆虫採取である。飛翔してきた昆虫が低温のため動けなくなり自動的にトラップされてしまう。河畔にはケショウヤナギがあり、これも北東アジア要素のひとつである。午後6時から途中の湖でフィッシングにトライするが1匹も釣れない。ウチュゲイに帰り、午後9時半に村長を表敬訪問する。村長はマルガリータという女性である。村の人口は400人、牛100頭、馬600頭、トナカイ1万頭という。今の時期、男達はトナカイの放牧に出て長期間村を空ける。このような関係もあり家を守る女性が村長という事になるのだろう。

### 7月3日

朝9時半、再びウチュゲイの西25kの小流に行き、ステップのクッションプランツや多肉植物の温度分布を調べる。小流ぞいにはヤナギ属やカンバ属の低木がありベニバナイチヤクソウがある。東シベリアでは、花卉が白く葯もクリーム色の個体と花卉がピンク色で葯が赤紫色の個体があり、この中間的な個体もある。後者のものはまさに日本のベニバナイチヤクソウと一致するものだが、前者をどう扱うべきか、いまだに悩んでいる。

### 7月4日

これから西410k先のハンディガまでの採集旅行を前に、ピノキェロフさん達は食糧の買い出しにでる。川を何回か越えるが、橋は原則としてないか壊れているので、車で渡渉することになる。車高の高いジープだが、水かさがあり流速が早い所もある。どのようなコースで渡るかはドライバーの腕の見せ所であるが、こちらは運を天にまかせるしかない。今日のキャンピングサイトは標高1,280mのツンドラ地帯でベルホヤンスク山脈の南につながるスタル・ハヤタ山脈の一部にあたる。彼らは手際よくテントを立てる。霧雨模様でやや寒く心細い限りだが、床にトナカイの毛皮を敷きストーブまでしつらえてくれると結構暖かい快適なテント生活となる。

### 7月5日

朝早くは雨が残っていたが、晴れてくると周囲は山岳に囲まれた絶景で、大雪山系



図4 スタル・ハヤタ山脈の標高1,200～1,300m地点。

のまん中にキャンプしているような錯覚に陥る。近くの1,640m峰に登る。溪谷は非常に豊富なフロラで採集に手間取った植物研究者は、一行からすっかり遅れをとってしまった。尾根は岩れきのガレ場が続き、ここにはロドデンドロン・レドウスキアナがある。湿原のサカイツツジとは住み分けているらしい。

### 7月6日

キャンプを徹収し、さらに西へ向かう。途中の湿生ツンドラには、ヒメシャクナゲ、ガンコウラン、クロマメノキ、ムシトリス



図5 スタル・ハヤタ山脈標高約1,600mのノボシーベルシア・グラキアリス。

ミレなどがある。不思議な事にこれだけ蚊が多いのに、ムシトリスミレの葉には全く虫がトラップされていない。まだ葉が若すぎるためなのか。ほとんど気がつかないほどのなだらかな峠を越える。ここでスタル・ハヤタ山脈を越え、時間を1時間戻す。やがて東ハンディガ川の支流河畔にあるヤクツク大学の地質学ステーションに着く。標高860~920 m。学生達の実習場所になっており、我々もここの一棟を借りる。夕方から支流ぞいに上流の滝まで採集にはいる。ステーション付近はダフリアカラマツ林で、林床は中湿でコケが生え、コケモモ、ベニバナイチヤクソウ、コイチヤクソウ、ラン科2種がある。さらに支流ぞいの谷は豊富なフロラで、キバナノコマノツメ、ハンショウヅル属、シモツケ属、イソツツ



図6 ダフリアカラマツ林床のベニバナイチヤクソウ。



図7 河畔のヒメヤナギラン。

ジ、ニオイシダなどからなり温帯要素が入りこんでいる。このあたりはベルホヤンスク山脈の南東端にあたる。ベルホヤンスク山脈は中央アジア高地と周極ツンドラ植物とをつなぐ経路になっているが、さらに渓谷には東北アジア温帯要素の植物が入り込み、南斜面のステップには中央アジアの砂漠ステップ植生が見られ、複数の植物分布要素が包含されている。

#### 7月7日

ビノキュロフさん達は採集に出るというが、日本隊は疲れもあり、地質学ステーションに残り、標本整理、近くの採集と洗濯などにあてる。ビノキュロフさんによると近くの山にベチュラ・ラナータの純林がダフリアカラマツ林上部にある、との事で興味をそそられた。ベチュラ・ラナータは日本

のダケカンバと同じではないかと疑われているので、一度は見たかったものだが、残念ながら今回は見る事ができなかった。この付近ではウスバキチョウが採集禁止になっているとの事で、コマクサがあるので、とひととき話題になる。

#### 7月8日

地質学ステーションを出発しさらに西進する。このあたりからセツテ・ダバン山脈に入り、道路は溪谷上部の山腹を進む。山道は崩れ易く、対向車とすれ違うのも難しそうな道幅であり、これまで車が何台も川に落ちているという交通の難所である。通称ブラックストーンを越え、イエローストーンで昼食、標高560mの支流ぞいに採集。ハンノキ属の低木林にはオニクが多い。少し進むと気象観測所があり、町のお店でタバコなどを仕入れる。ここまで来るともう山岳とも離れハンディガまでは平地が続く。廃虚になったセツルメントがありいかにももの悲しい所に着く。コリマ街道建設には多数の囚人が犠牲になったので人骨街道ともいわれるそうだが、このような囚人達の住んでいた所だったのか。やや離れた

東ハンディガ川川原(標高430m)にキャンプを張ることとする。

#### 7月9日

キャンプ横の川原にあるダフリアカラマツ林にはピケア・オポバータが混生し、林床にはユニペルス・シビリカがある、さらにアツモリソウ属などのラン科植物があり、かなり温帯要素が入り込んだ林であった。さらに支流ぞいに上流にはいっていくと河畔はヤマナラシ属とハンノキ属の林である。大きな岩塊からなる崩壊地があり、ここでナキウサギを見る。生息地はやはり北海道と同じような所だと納得する。午後9時15分キャンプサイトを後にし、ひたすら西進する。約150kでアルダン川に面するハンディガ着、夜中の0時30分。暗い闇の中に雨も降り出し、濡れながら荷物を船着場に運ぶ。ここから首都ヤクーツクまでは高速船がつないでいる。午前3時船に乗り込むやいなや皆ぐっすり眠りこんでしまった。

今回の調査旅行は北大低温研の福田正己教授代表の科研費国際学術の一部としておこなわれた、記して感謝いたします。